博士論文審査及び最終試験の結果

審査員（主査）　根岸　雅史

学位申請者　三浦　愛香

論 文 名　Corpus Pragmatics: Exploring Criterial Pragmalinguistic Features of Requestive Speech Acts Produced by Japanese Learners of English at Different Proficiency Levels

【審査結果】

根岸雅史を主査とし、副査として研究指導委員会より投野由紀夫（主任指導教員）、佐野洋、吉冨朝子、能登原祥之（外部審査員：同志社大学）の計５名によって構成された審査員会は、2018 年 12 月 28 日に上記論文の審査および口述による最終試験を行った。その結果、審査員会は全員一致で、申請者に対し博士（言語学）の学位を授与するのが適当であるとの結論に達した。

【論文の概要】

本研究は、学習者の産出する発話や作文のデータを大量に収集した「学習者コーパス」を用いた中間言語語用論研究（interlanguage pragmatics）として位置づけられ、学習者コーパスが、中間言語語用論の分野で、その理論深耕に寄与することを実証的に明らかにした。

中間言語理論は，第二言語（外国語）の学習者が言語を学ぶ過程で産出する表現－目標言語とは，多面にわたる点（音声や語，文法面など）で独自の特徴を持つ言語体系が学習者の認知（知識や思考様式）として在ることを仮定する考え方である。第二言語習得研究においては、近年中間言語語用論研究が盛んに行なわれているが，著者は日本語を母語とする英語学習者コーパスを言語運用データとして利用し、CEFR といった言語習得の段階性と客観的なデータ分析手法を用いて，語用言語学的な機能分析を行なった点において新奇性が認められ，高く評価するに値する。

論文は７章および付録のアノテーション・マニュアルから構成され、Appendix を含めると総ページ数 499 ページ（本文 311 ページ、付録他 188 ページ）である。その特色は、NICT JLE Corpus という世界でも最大規模の英語学習者話し言葉コーパスを用いて、要求の発話行為が分析可能な買い物のロールプレイ場面を選び、極めて詳細な語用論タグを手動で付

与、CEFR レベル別の語用論的能力の発達を計量的に明らかにしたことである。特に要求の発話行為の場面を買い物に限定して、そこでの学習者のやりとりを総合的なアノテーション・スキームを独自に開発して、詳細に注釈付けを行った点は中間段階で発表した国際学会等でも高い評価を得た。

第 1 章では本研究の目的、論文の構成が概観され、第 2 章では先行研究の調査の中で、中間言語語用論の理解の基礎となる、語用論における言語行為理論（2.2）、ポライトネス理論及び要求発話行為（2.3）、CCSARP プロジェクト（2.4）、語用論とコーパス言語学（2.5）、中間言語語用論（2.6）を概観している。中間言語語用論は、Kasper & Rose (2002) によると、「語用論的発達として、第二言語学習者が対象言語における理解と行為を遂行する能力をどのように発達させていくか」（p.5）を検証する分野として定義されている。また、近年、Vyatkina & Rose (2015)は、「中間言語語用論に携わる研究者は、ますます、学習者コーパスに収集された様々なテキストを調査・探索することによって、第二言語学習者が、特定の社会状況にて効果的にそして適切にコミュニケーションをはかる能力をどのように発達させていくかの実態を把握できるようになった」（p.285）と述べている。

第 3 章では、三浦氏が過去に行った学習者コーパスを用いた中間言語語用論の先行研究をまとめており、これらの研究が博士論文の重要な予備調査になっている。NICT JLE Corpus という 1200 名余の日本人英語学習者の口頭インタビューテストの会話コーパスの構成を詳述し（3.1）、それをもとに談話標識類の既存の分類に基づく「形式から機能への分析（form-to-function analysis）」、その逆の言語機能を中心に形式に詳細にアノテーションを施す「機能から形式への分析」を、CCSARP（Cross-Cultural Speech Act Realization Project）のコーディング・スキーム（Blum-Kulka, House & Kasper,1989）に基づき、NICT JLE Corpus のサブコーパスの 1 つである買い物のロールプレイにおける要求の発話行為の言語特徴を手作業で特定し、詳細なアノテーションを付与した。これらの結果から、CCSARP のスキームを学習者データにそのまま当てはめることの問題点や、社会語用論的な側面も見ることによる評価者の判断のぶれが極端に大きくなることなどを指摘し、語用言語学的（pragmalinguistic）な側面に限定して分析することの正当性を主張した。

第 4 章では、博士論文の本調査の理論的な背景を説明する。本調査のアノテーション構造で参考にした CCSARP コーディング・スキームは、DCT（Discourse Completion Task談話完成タスク）と呼ばれる抽出タスクから収集したデータを基に開発されている。DCT とは、被験者に、ある特定の社会状況を与え、その状況下でどのような依頼をするかを書いたり話してもらうデータ収集の手法である。中間言語語用論の分野では、この DCT が最も主流な手法として現在まで用いられてきている。それは、タスクにおける参加者の役割や状況に関する社会的変数（聞き手と話者の社会的な力関係や社会的な距離など）を、研究者が容易に制御できる利点があり、研究の目的に即した発話行為のみを抽出するデザインの構築とデータ収集が可能になるからである。しかしながら、DCT の手法で収集したデータは、

学習者が実際の状況で遂行する発話行為の実態と乖離しているのではないかという批判が多い。一方、学習者コーパスのような自然発生的な話し言葉から成る言語データを扱えば、学習者が実際の場面でどのような発話をしているかを習得段階別に観察することが可能になる。つまり、第二言語学習者がどのように語用論的能力を発達させていくかの変容を明らかにする計量的なデータソースとしての利点がある。さらに、コーパスから得られた証拠や情報を提供することによって、先行研究によって示された結果や考察を補完したり、再検証したりすることも可能になる。このような DTC の限界と中間言語語用論における学習者コーパスを使用する利点、コーパスへの語用論情報アノテーション構造の概説、NICT JLE Corpus における買い物のロールプレイ部分を使用する理由などを詳述し、最後に本論文の研究設問を整理している。研究設問は、「(RQ1) 買い物の発話行為で学習者が示す具体的な発話機能は何か。それは習得段階でどのような変化があるか。(RQ2) 学習者の発話の文法的正確性、談話的適切性はどのようなものか。(RQ3) どのような談話言語学的な特徴や要求のストラテジーが見られるか。それらが習得段階やタスクの違いでどのように変化するか。」である。

第 5 章では、本調査の方法論を解説している。本研究の目的を達成するために、CEFR (Common European Framework of Reference for Languages)(ヨーロッパ言語共通参照枠) の A1、A2 及び B1 レベルの異なる習得段階にある日本人英語学習者による要求の発話行為における語用言語学的な基準特性 (Criterial pragmalinguistic features) の抽出を試みた。基準特性 (Criterial features) とは、Hawkins & Filipović (2012) によると、「第二言語学習者の能力を習得段階ごとに特徴づけ、より高い習得段階とより低い習得段階を弁別する学習者英語の特徴である」(同, p.11) と定義されている。

CCSARP コーディング・スキームが抱える問題点を精査し、表層的な言語項目に現れない (直接的または慣例的な表現を用いない) 間接的なストラテジー (non-conventionally indirect strategy) の分類を除外、さらに学習者の要求の発話行為の適切さや丁寧さ (ポライトネス) に関する社会語用論的能力 (sociopragmatic competence) を測ることも除外した。これにより CCSARP を研究対象の話し言葉の学習者コーパスに適合できるよう改良を加え、買い物のロールプレイに見られる要求の発話行為を以下の 3 つに分類した。その 3 つとは、「直接的なストラテジー (direct strategy)」、「慣例的な表現を用いた間接的なストラテジー (conventionally indirect strategy)」(以下「慣例的なストラテジー」)、そして「分類できないもの (not-classifiable)」である。さらに、

次に、NICT-JLE Corpus では、異なる学習段階における学習者が異なるタスクを与えられているため、要求の言語項目の頻度情報や分布を習得段階別に比較する上で、タスクの影響を無視することができないというデータの弱点を克服するため、全ての要求の言語機能を特定するアノテーション・スキームを開発し、言語機能ごとに頻度情報や分布を抽出することにした。最後に、習熟度の違いによる傾向をより明らかにするために、CCSARP に基づ

いた要求の発話行為に現れる言語項目の分類だけでは測ることができない、要求の発話行為の文法的正確さと談話的な適切さの度合いを特定するアノテーション・スキームを開発した。

第 6 章は本研究の結果と考察についてまとめている。CEFR レベル別の買い物場面での要求の発話行為は、習得段階が上がるにつれて、慣例的なストラテジーの使用が増え、直接的なストラテジーの使用が減ることが観察された。この結果は、異なる習得段階にある学習者の要求の発話行為を分析した一連の先行研究の結果とも一致した。一方、要求のストラテジーを決定付ける言語項目の分布が、同じ習得段階の学習者においても、要求の言語機能によって異なることが示唆された。例えば、A1 及び A2 学習者は、試着や試食などを依頼する言語機能を持つ要求において能力･許可の助動詞を使用する慣例的なストラテジーを直接的なストラテジーより多く発話した。それは、Can I try it on? のような定型表現を既に習得しているからだと考えられる。一方で、購入したい品物の詳細（色、大きさや種類など）を伝える要求では、自ら発話を構築する必要があるため、単語のみの発話や The color is black. と言った母語の影響を受けたトピック・コメントの構造を持つ学習者特有の直接的な言語特徴が観察された。A1 及び A2 学習者は品物の購入のタスクが与えられている一方、B1 学習者は返品交渉のタスクが与えられているため、B1 学習者の発した要求は、返品や交換を依頼する機能を持つものが大多数を占めた。B1 学習者は、慣例的なストラテジーを直接的なストラテジーをより多く用い、要求の主要行為を修飾する内的調整（internal modification）及び外的調整（external modification）の言語使用の頻度も A1 や A2 学習者より高く、文法的・談話的な適切さの度合いも高かった。しかし、慣例的ストラテジーの助言の言語項目で Why can't you exchange it?のような語用論的に逸脱していると思われる発話行為も観察されることから、B1 レベルにある学習者でも、自らが選択した言語が聞き手に与えうる要求の高圧度の高さを十分に認識していないことも示唆された。B1 学習者は、A1 及び A2 学習者に比べると言語能力は発達していると言えるが、それだけ高い語用論的能力を示すとは一概には言えないといえる。

最後に第 7 章では、研究全体の総合的考察を行っている。本研究では、アノテーションの信頼性や再現性等研究手法に改善が望まれる点が見られたものの、全般的には、学習者コーパスを用いて、要求の発話行為の言語語用論的な特徴抽出が異なる習得段階別に可能になり、各習得段階において語用論的に何ができるのかの実態を明らかにすることができた。また、発話が聞き手に及ぼす FTA（Face Threatening Act）を異なる習得段階の学習者がどの程度意識しているかの推移も推察することができ、社会語用論的能力の一端も示唆することができた。最後に、DCT 等を用いた先行研究で導かれた結果や考察についてもコーパスを用いた本調査での頻度情報や検証結果を活用すれば、その妥当性について再検証できることから、本研究によって学習者コーパスが中間言語語用論において大いに貢献できる可能性を示した。

【審査の概要及び評価】

審査は冒頭に審査員の紹介、主査による進行の説明があり、続いて三浦氏から論文概要の説明が約 40 分間行われた。それに引き続き、各審査員と三浦氏の間で活発な質疑応答が行われた。約 120 分の公開審査の後、審査員会で最終審議を行い、上記のごとく判断した。

審査員によるコメントは概略以下のようであった：

《良い点》

- 300 ページを超える大冊で、語用論という意味機能領域をコーパスに基づいて言語注釈を精密に行うという大変な時間のかかる作業をこなした労作である。
- 語用論研究に資する多層構造の複雑なアノテーション・スキームを自作し、海外での学会発表で専門家の評価も高かった。かつ評価者間信頼度係数をもとに可能な限り信頼性・妥当性を高めようとした点も高く評価できる。
- 分析対象を手堅く絞り込んで、NICT JLE のデータを XML で整形、分析も XML-aware なアノテーション・ツールを用意して、結果もしっかり出せていた。
- function to form の分析は非常に時間と労力を要するものであるため、それをやり遂げた点は高く評価できる。また、データ分析の量的な結果だけでなく、学習者が実際に使用した具体例を適宜示すことで論点が明確化されており、「学習者の顔が見える」論考となっている点も秀逸である。
- CEFR A1, A2, B1 のレベルの基準特性も弁別できているという面でも力作だった。

以上のような良い点があることを認めた上で、審査員から論文の課題に関して以下のような質問やコメントがあった：

《質問・コメント》

- NICT JLE Corpus のソースである Standard Speaking Test を利用したため、もともと 10 段階のレベルが CEFR の A1～B1 に圧縮された結果となり、レベル別詳細情報が脱落してしまった印象があるが、その点分析上問題はなかったか。
- 要求の機能の中でも買い物はかなり限定的な場面・状況であるので、要求全体への結果の一般化はどの程度可能なのか。
- Interviewer の発話を分析に入れていないが、対話技能を見るには考慮しないことによる分析の不十分な点が予測されるが、その点はどうだったのか。
- アノテーション・スキームを構築する際に、語用論としての機能分類の枠組をもう少

しよく考えて作った方がよかったのではないか。(例：同等の比較可能な概念カテゴリーを作り、機能の抽象度をもっと上げた方がよかったかもしれない)

- タスクの role play はどの程度指示が統一していたのか。Interviewer のテスト内での役割等が影響をしなかったか。
- 最後の考察部分では、教育への示唆が少し抑制的で、もう少し広範な観点を論じて欲しかった。
- ポライトネスの語用論で見た場合、果たして結果は大規模データで収斂するのかという根本的な問いがある。ポライトネスも１つではなくもっと複雑な内部構造を持つものであるかもしれない。語用論では、実在論的な考え方の違いをもっと考慮するべきではないか。存在の観念が違っているということもありえる。

以上の質問や指摘は本論文の学術的な価値を損なうものではなく、むしろ今後のさらなる研究の発展のための激励や助言と捉えられるものであった。審査員からの問いかけやコメントに対し、三浦氏からは問題点をよく自覚した上で、的確な応答や解釈、また将来に向けた課題として受け止める旨の表明がなされた。指摘された課題を真摯に受け止め、今後の研究に反映させていく姿勢も窺え、研究者として今後の発展と活躍が期待された。以上のような審査内容を受けて、審査員は全員一致で本論文は博士の学位にふさわしい成果であると判断した。